



図画工作の学習での地図活用

奈良教育大学教授 岩本廣美

紙という平面に表されている地図をもとにして、立体的な地図をつくることができます。これを造形活動ととらえれば、図画工作の授業との関連を考えることができます。

ここでは、図画工作の造形活動の中で地図を活用するアイデアを、簡単な活動からやや本格的なものまで、3事例紹介します。

いずれの活動も、ねらいは、造形活動を楽しみながら、主要四島を中心に日本列島の形状や山地の分布をおおよそ把握することです。

1 砂場で日本列島をつくる

砂を使った造形活動は、季節によっては素足になって砂場に入ることもできるため、どの子どもも喜んで参加できる全身を使った活動です。砂場の広さにもよりますが、子ども3～4名のグループで、2m四方ていどのスペースを使うのが適当でしょう。

この活動では、『楽しく学ぶ小学生の地図帳最新版』（以下、地図帳）を用意し、p.16～18の日本列島主要部を表した基本図（以下、基本図）を広げたうえで、砂場を平らにならし、以下の手順で日本列島をつくっていきます。砂は多少湿っていたほうが造形は容易です。

- (1) スペースをいっぱいを使って、地図帳の基本図を見ながら、日本列島主要四島のおおよその輪郭線を引く。
- (2) それぞれの島の形があるていどは正確になるように、海に相当する部分の砂を削り取り、主要四島を浮かび上がらせる。
- (3) 地図帳の基本図で、茶色が濃いところを探し、主要四島の該当箇所それぞれに砂を積み上げ、山地をつくる。とくに高い山の存在に気づいた場合は、砂を加えて山をさらに高くする。富士山などに白い砂をかけるのもよい。



図1 『楽しく学ぶ小学生の地図帳 最新版』 p.16～18



中学年に向くこの活動では、等高段彩の凡例の詳細など、子どもに細かいことは求めず、地図帳を読むことが楽しいという経験を持たせることが大切です。

2 紙粘土で日本列島をつくる

紙粘土で再現できる日本列島の精度は、砂を使った場合と大差ありませんが、紙粘土は乾くと絵の具で彩色できる点で、砂とは異なった面白さを持つ素材です。ここでは、一人分の紙粘土（1kg）を使って、机の上で、小さな日本列島をつくる場合を考えてみます。使う地図は、「地形のようす」を表した地図帳p.65①がよいでしょう。手順は次のとおりです。

- (1) B 5サイズの板（または下敷き）を用意し、板の上に鉛筆で主要四島の輪郭を描く。
- (2) 一人分の紙粘土の約半分を使って、(1)の輪郭の上に薄く広げていく。
- (3) 残り半分の紙粘土を使い、「地形のようす」の地図で茶色の濃い部分を探し、(2)の主要四島の上に山地をつくる。
- (4) (3)がよく乾いたら、絵の具で、平野の部分を黄緑色、山地の部分を茶色で着色する。富士山などをとくに濃い茶色で塗るのもよい。

(1)～(4)の過程で案外に難しいのは、準備段階に当たる(1)です。板に描く前に、同じサイ

ズの紙の上で練習するのも一案です。

3 段ボールで日本列島をつくる

段ボールは、重ねて使うことによって、立体表現ができ、基本図の等高段彩の原理を体験的に学習することのできる素材です。地図帳の基本図をもとに、段ボールを使って立体的な日本列島をつくる手順は次のとおりです。

- (1) 地図帳の基本図から、B 4サイズ2枚に分けてカラーコピーを2セットとる。1セット分は糊でつなぎ合わせて、日本列島を連続させる。もう1セットは、主要四島の島ごとに分けて用意する。
- (2) B 3サイズの薄手の段ボールに、(1)の連続させた日本列島を糊で貼る。
- (3) B 3サイズの薄手の段ボールをもう1枚用意し、(1)の島ごとの日本列島を糊で貼る。
- (4) 主要四島を島ごとに貼った段ボールは、標高600メートル以上の部分を、おおよそ線に沿って切りとる。
- (5) 切りとった部分は、(2)の連続している日本列島の上に、重ね合わせて貼りつける。

(4)の切りとる作業は技術的に簡単ではありませんが、一連の活動によって、子どもは、等高段彩の意味を、実感を持って学習することができます。また、重ねる枚数を3枚、4枚と増やしていくことも可能性としては考えることができます。

段ボールで日本列島をつくる活動は、一人でできないわけではありませんが、2～4名のグループで取り組むほうがよいでしょう。

* * *

以上の3つの事例のうち、1と3はグループ活動が前提です。グループの子ども同士が協力し合う過程で、「話し合い」という言語活動が促されることはいうまでもありません。

* 弊社ホームページに、図画工作の地図活用に関連するワークシートを掲載します。